

奈良時代	
710	平城京遷都 <sup>せんと</sup>
712	『古事記』
720	『日本書紀』
759	『万葉集』最後の歌
平安時代	
794	平安京遷都
9c 後半～ 10c 初め	『竹取物語』
905	『古今和歌集』 <sup>こきん</sup>
1000 頃	『枕草子』 <sup>まくらのそうし</sup>
1008 頃	『源氏物語』
12c	『今昔物語集』 <sup>こんじゃく</sup>
1185	平家滅亡 <sup>めつぼう</sup>
鎌倉時代 <sup>かまくら</sup>	
1205	『新古今和歌集』

● 和歌

五音と七音を基調とした定型詩。

持統天皇 ぢとうてんわう

春過ぎて

春が過ぎて

夏来たるらし

夏が来たらしい。

白たへの

真っ白な

衣干したり ころも

衣が干してある。

天の香具山 あめ かぐやま

あの天の香具山に。

山部赤人  
やまべのあかひと

田子の浦ゆ  
たご

うち出でて見れば  
い

真白にそ

富士の高嶺に  
ふじ たかね

雪は降りける

田子の浦を通って

視界の開けた場所に  
出してみると、

真っ白な

富士の高嶺に

雪が降っていたことだ。

額田王 ぬかたのおほきみ

君待つと

あなたをお待ちして

吾が恋ひをれば

恋しく思っていると、

我が屋戸の

わが家の戸の

すだれ動かし

すだれを動かして

秋の風吹く

秋風が吹くことよ。

おほとものやかもち  
大伴家持

春の野に

春の野に

かすみたなびき

霞かすみがたなびき

うら悲し

わが心は悲しみに沈しずむ。

この夕影に

この夕日のなか

うぐひす鳴くも

鶯うぐいすが鳴いてるよ。

（東歌）  
あつまうた

多<sup>た</sup>摩<sup>ま</sup>川<sup>に</sup>

さらす手作り

さらさら

なにそこの児<sup>こ</sup>の

ここだかなしき

多摩川で

さらす手作りの  
布のように、

さらさら

どうしてこの娘<sup>むすめ</sup>が

こんなにもいとしく  
なるのだろう。

(防人の歌)  
さきもり

父母が

頭かしらかきなで

幸さくあれて

言ことひし言葉ばぜ

忘れかねつる

父母が

頭をなでて

無事でいろと

言ってくれた言葉が

忘れられないことだ。

山<sup>やまのうへのおく</sup>上<sup>ら</sup>憶良

瓜<sup>うり</sup>食<sup>は</sup>めば

瓜を食べると

子ども思ほゆ

子どものごことが自然と  
思われる。

栗<sup>くり</sup>食<sup>は</sup>めば

栗を食べると

ましてしぬはゆ

さらにもまして  
しのばれる。

いづくより

いったい、子ども  
というものはどこから

来たりしものぞ

来たものか。

まなかひに

目の前に

もとなかかりて

わけもなくちらついで、

安<sup>やす</sup>眠<sup>い</sup>しなさぬ

安<sup>あん</sup>眠<sup>みん</sup>をさせない。

反歌 はんか

銀も しろかね

金も玉も くがね

何せむに

勝れる宝 まこと

子にしかめやも

銀も

金も玉も、

どうして

優れた宝である すぐ

子に及ぶだろうか、 およ  
いや及びはしない。

●古今和歌集

紀貫之きのつらゆき

袖そでひちて

(夏の日に)  
袖をぬらして

むすびし水の

両手ですくいあげた水が

ごほれるを

(冬の到来とうらいとともに)  
凍こおっていたのを、

春立つけふの

立春の今日の

風やとくらむ

風が今頃ころとかしている  
ことだろうか。

よみ人知らず

五月待つさつき

花たちばなの

香をかげば

昔の人の

袖の香ぞする

五月を待つて

咲く花はな橘たちばなの

香をかぐと、

昔親しかった恋人の

袖の香りがすることだ。

みなもとのむねゆき  
源 宗子

山里は

冬ぞさびしさ

まさりける

人目も草も

かれぬと思へば

山里は、

冬がいちだんと  
さびしさが

まさって感じられる  
ことだ。

訪れてくる人も  
なくなり、草も

枯<sup>か</sup>れてしまふと思ふと。

をのこまち  
小野小町

思ひつつ

寝ぬればや人の

見えつらむ

夢と知りせば

覚めざらましを

あの人のことを恋しく  
思いながら

寝ねたので、あの人が

夢の中に現れたの  
だろうか。

もし、それが夢と  
知っていたなら、

目を覚まさなかった  
だろうに。

●新古今和歌集

ふぢはらのさだいへ  
藤原定家

春の夜の

春の夜の

夢の浮橋うきはし

短くてはかない夢が

とだえして

ふととぎれて（見ると）、

峰みねにわかるる

山の峰から横雲が  
別れてゆく

横雲の空

明け方の空で  
あることよ。

西行法師さいぎやうほうし

心なき

身にもあはれは

知られけり

鴟しぎ立つ沢さはの

秋の夕暮れ

出家して俗世間の  
感情を捨て去った

僧そうの身である私だが、  
しみじみとした気持ちを

もってしまおうよ。

鴟しぎが飛び立つ沢の

美しい夕暮れを見ると。

式しよく子しない内しん親わう王

玉をの緒よ

絶えなば絶えね

ながらへば

忍ぶることの

弱りもぞする

私の命よ。

絶えてしまうなら  
絶えてしまいなさい。

これ以上生き長らえて  
いると、

この恋を胸に秘ひめておく  
気力が弱まり、

人に知られてしまうと  
いけないから。